研究論文

纏足から放足へ
―中国女性の装いと身体性―

From Foot-binding to It's Releasing
An aspect of corporeality of Chinese women in history

謝黎
Xie, Li
聖心女子大学　非常勤講師

1．はじめに

纏足（てんそく）といえば，入れ墨や割礼と同様に，身体の特定部分に対して変形を施す習俗として知られ，歪められた女性の身体の苦痛や，男性による抑圧の象徴として語られることが多い。また，近代的なまなざしでは，「未開」「野蛮」なものと受け止められがちである。さらに，伝統的中国社会の家父長制の下に，女性虐待やグロテスク，フェティシズムといったイメージを持つ人も少なくない。しかし，歴史上の漢人社会では，纏足は漢人と非漢人を区別する指標と見なされ，誇り高い「文明の象徴」であった。

この「纏足」という激痛をともなう身体変形の習俗は，千年以上も続いていた。女児が４歳か５歳になると，母親あるいは親族の女性が長い布を使って足を縛りはじめ，少しずつ足の形を変えていき，足の骨格が定型するまで巻き続ける。

これほどの痛みに耐えてまで，女性たちはなぜ長いあいだ，この習俗をやめなかったのか。足を無理に小さく縛る理由は何なのか。辛い思いをして女性たちが手にしたものは何か。かつての中国の男性たちは纏足のどこに魅力を感じていたのか。纏足という不思議な文化事象は，中国国内外からどのように見られていたのか。なぜ，纏足は「文明の象徴」から「悪しき風習」となったのか。纏足から放足（纏足した足を解放する）へと変化する中で，女性の身体はどのように位置づけられていたのか。

私は2022年に聖心女子大学が主催する展示企画[1]に参加した際，実物の展示にあたって，日本人の展示企画者や学生たちが「纏足の靴」という言葉を使うことにはっとさせられた。この言葉から察するに，彼（女）らは「変形した小さな素足」と「刺繍のある小さな靴」を別々の事物として認識していたらしいからである。中国では，わざわざ「纏足の『靴』」と靴自体を強調して呼ぶことはあまりなく，素足と靴を一つの対象として「纏足」，あるいは「裹脚（かきゃく）」と表現することが多いのだ。

そのことから私は，自分が「纏足」という事象を「靴と人間」を一体化した習俗として見ていることを「発見」したともいえる。纏足を，身体装飾からかけ離れた「モノ」と「足」と見るのか，あるいは身体装飾の一部として「足の入った靴」と見るのか，日本と中国でのイメージにズレがあったのかもしれない。

実際に授業で纏足にまつわる歴史と文化を聞いた学生たちは，授業後にインターネットで素足の纏足の写真を目にした時に，衝撃を受けて思考停止になることがしばしばあった。その衝撃は「変形した素足」だけが強調されることにあって，靴を履いていた「女性の存在」を想像する余裕がなかったことにあるのだろう。日本では，「小さな靴」と「人間」を別々に認識していて，「靴は人間が身に着けていてこそ意味がある服飾の一部」という発想があまり見られないのだ（語弊のないように言うと，現代ファッションではなく，特定的に纏足に関して）。

一方，中国では，纏足を身体装飾の一部として見ていて，髪型も服装も靴もすべてコーディネートの中にある。中国語ではわざわざ「纏足の靴」といった表現を

1 「美か束縛か―纏足・コルセットの歴史と＃KuToo運動」という展示企画（2022年5月12～10月5日），主催：聖心女子大学グローバル共生研究所。

せず，「纏足」といえば，「靴と人間が一体化した」全体としての「小脚女人」のことを言う。あえていえば，この靴と人間との関係性こそが,「野蛮」や「未開」といったステレオタイプな西洋区分の文脈の中では語りえない，纏足にまつわる複雑な社会背景を読み解く導きの糸になることができるのである。

本稿では，その複雑な社会背景を描くにあたって，纏足が歴史的文脈の中でどのように変遷してきたのか，またその変遷の中で当事者である女性の意識はどのようであったのか，　男性の好み（とされたもの）は何だったのか，なぜ千年ぐらい続けられていたのか，といった問題を整理しつつ，装いにみる中国女性の身体における束縛と解放の歴史をジェンダーやセクシュアリティの観点から辿り，女性の身体と家や国家とのかかわり方を考察し，近代中国での纏足観の錯綜と推移を見ていきたい。

2. 纏足の歴史的変遷

纏足の起源については諸説あるが，10 世紀ごろに始まったというのが圧倒的に多い。とくに, 五代（907-960），北宋（960-1127）ごろに始まった，という説が多い（吉岡，1991，p.236；高，2007，p.22）。

しかし，宋朝の女性全員が纏足をしていたわけではなく，一部の上流階級の女性に限られていた。さらに，すべての上流階級ではなかったことも分かっている。また，宋朝の纏足は後世のものより大きい。細くてまっすぐで，アーチ状になっておらず，長さは 13 センチ～ 17 センチぐらいで，現在でいう「三寸金蓮」（9 センチの纏足）より長い（図 1）。

図 1　金朝（南宋と対峙した王朝）の纏足（1208年頃）
出典：コウ, ドロシー（2005）『纏足の靴―小さな足の文化史』平凡社，p.33

流行方法には二つの特徴がある。第一に，大都市から地方へ。北宋の首都である開封（当時の汴京）や南宋の首都である杭州（当時の臨安）は纏足の流行地だったが，徐々に地方へと広がっていった。第二に，北方から南方へ。北宋時代では，長江の南の地域（江蘇，浙江，広東，広西，海南など）の女性は纏足していなかった（高，2007，p.24）。

金朝（1115-1234，中国北方と東北地域を統治した女真人の王朝）の女真人たちは，纏足をしている女性を好んでいたので，若い女性や纏足をしている 30 歳以下の南宋の女性は生き残ったが，逆に 30 歳以上の漢人女性や，纏足をしていない人はみな殺されたという記録もある（高，2007，p.25）。その後，金朝が漢文化と接触する中で，女真人の女性も纏足をするようになった。

宋の後の元朝（1271-1368, モンゴル人が建国した王朝）は，モンゴル人の支配だったが，漢人女性の纏足風習に反対しなかった。むしろ南宋より纏足が流行するようになった。元朝末になると，纏足をしないのは恥であるという観念さえ現れた（高，2007，p.25）。とはいえ，元朝においては纏足をしなかった女性も多くいた。たとえば，元朝では，かつて南宋地域にいた漢人を「南人」と呼んで，彼らを低い身分としたが，その女性たちの纏足は禁止されていた。纏足は家柄や上流家庭を示す印だったからである。一方，モンゴル人の女性は，男性と同じ大きさの靴を履いていたことが洞窟の壁画に描かれていた（沈，1981，p.394）。

しかし, 明朝（1368-1644, 漢人が建立した王朝）になると，纏足の風習は大盛期となった。明朝初代皇帝の朱元璋（明朝を建立した漢人の皇帝）は, 自分と対抗していた人々を「丐戸」（賤民）といい，「丐戸」の男性には教育を受けることを禁止し，女性には纏足を禁止していた。この禁止政策から分かるように，纏足をするかしないかは，女性の社会的地位や貧富貴賤の標識であり，ステータスを表すものであった。纏足を「三寸金蓮」と呼ぶのも明朝から始まった。小さいだけではなく，弓のように曲がる足が美しいとされるようになった（高，2007，pp.26-27）。

清朝になると，纏足の流行は頂点に達した。清朝政府が何度も禁止令を下したが効果はなかった。仕方なく 1668 年に禁止令を廃止した。政権を取ったばかりの勢いのある清王朝も纏足の風習を止めることができなかったことから，いかに纏足の風習が人々の心の奥まで浸透していたかが分かる。さらに言えば，漢人女性が纏足風習を続けることは，単に風習というだけではなく，清朝初期に起きた漢人男性の辮髪（満洲人男性の髪型だが，強制的に漢人男性に強いられた）への抵抗と同じ意義を持つ。つまり，「女性が纏足を続けること」と「男性が辮髪をしないこと」は，ともに満洲人に屈服しない，漢人のアイデンティティの表れであるといえる。

清朝期では，漢人女性のあいだに流行していた纏足の風習に興味を持ち真似しようとした満洲人女性もいた。「八旗」（満洲人の狩猟組織に由来した社会・軍事制度）は,「満洲人八旗」「モンゴル人八旗」「漢人八旗」の三つの集団によって構成されていた。政府は「八旗制」に属している旗人（戦時に軍人になるが平時に農作業や狩猟をしている）たちに纏足の禁止令を何度も下した。満洲人やモンゴル人には禁止令を守る人が多かったが，一部の地域の漢人八旗では，稀ではあっても従わなかった者が現れ

た[2]。当時，清朝政府は八旗の中から宮女を選んでいたので，漢人八旗には，自分の家族が宮女に選ばれないように，わざと幼女に纏足をする者さえいた。

こうして清朝期に纏足は大流行となり，漢人のみならず，満洲人女性にもそれを美しいと思っていた人が少なくなかった。しかし，清朝皇帝の纏足禁止令に従わないといけないので，折衷策として旗人は「刀条児」（図2）という満洲人女性の足のスタイルを「発明」した。

図2　八旗の女性たちの「刀条児」
出典：高洪興（2007）『纏足史』上海文芸出版社，p.34

「刀条児」は光緒年間（1875-1908）中期に八旗の女性たちの間でもっとも流行った。漢人女性の纏足の形と違っていて，平らな刀のような形なので「刀条児」と呼んでいた。親が幼少期から骨を徹底的に変形させるのではなく，10歳～15歳ぐらいから布を巻き始めて，細身に小さく見せようというもので，娘たち自身がやりたかったから布を巻いただけだという（坂元，2004，p.161）。そのために，漢人女性のようにきつく巻かず，1か月ぐらいででき上がる。満洲式の纏足である「刀条児」は，足の形が少し細くなって，足先が尖って見せることができれば「成功」だと見なされていた。ただ，足の変形は漢人女性のようにひどくないとはいえ，やはり痛いことは痛く，腫れることもあった。この八旗女性の「刀条児」は，流行と禁止令の狭間に生まれた「纏足」だが，漢人男性たちからすれば，本当の纏足ではない，「天足式」纏足に見えた。したがって，美しい漢人女性の「三寸金蓮」と比べると醜いのだという（高，2007，pp.34-36）。

以上のように，漢人女性の纏足風習は，宋朝から始まって徐々に蔓延していき，明朝を経て清朝になると頂点に達した。この風習は北方から徐々に南方へと，また一部の地域から全国へと広がっていった。纏足の形も大きめな直線型から小さなサイズへと変遷し，明・清期になると弓形（図3）のような極小の形へと変化していった。

図3　弓形の「三寸金蓮」
出典：高洪興（2007）『纏足史』上海文芸出版社，p.93

3. 纏足の美

現在グロテスクと思われている纏足は，かつての中国の男たちにとっては，自分たちを夢中にさせる美しいものであっただけではなく，女性の「価値」や「美」を判断する基準となっていた。ところで，纏足のどこが「美」なのか，男たちはどこに魅了されていたのか。この節では，纏足の基本的な特徴や，女性の美醜を判断する基準の詳細について述べる。

一般的に纏足は，次のような特徴がある。①足のサイズが小さいこと。普段民間の人たちが「三寸金蓮」と呼んでいる纏足は，実際の女性の足のサイズとのあいだに大きなズレがあったことも多いが，極端に小さい足なら，お皿に乗せたりすることができるぐらい小さかった（2寸～5寸の間）。②足指の形が変形していること。親指だけ伸びているが，ほかの4本の指は曲がって足底に圧縮されている状態。③足の前面の部分の形状が尖っていること。④足の甲は盛り上がり，足裏の真ん中は弓のように凹んでいること。⑤足首と足の間が傾斜していること。

清朝期の纏足ファンの「美の基準」についてだが，いろいろな言い方がある中で，もっとも流行ったのは七つの秘訣である（高，2007，pp.68-77）。これは，①小さい（小），②贅肉をなくし形が痩せていてすっきりしている（痩），③足の指先部分が尖っている（尖），④足裏が凹型であって全体的に弓のように曲がっている（弯），⑤清潔感があって，肌が白くていい香りがする（香），⑥足が柔らかくてすべすべな肌をしていて握り心地が良い（軟），⑦偏りがなくバランスの取れた形の七つである。

現実には，このような纏足の形をしている女性はほとんどいない。纏足ファンの心の中に描かれている「美しい纏足像」は，あくまでも男たちの理想に過ぎないのだ。

2 漢人八旗とはいえ，基本的に旗人の家の女性が纏足をしていると処罰されることになる。わざと纏足をしていたことは，あくまでも一時的な現象であり，限られた地域で行われていた。嘉慶期（1796-1820）の北京や光緒期（1875-1908）の広州などで見られた。

当時の審美観からすれば，単に足そのものが小さければ良いわけではない。きれいな靴に包まれている小さな足と胴体との比率を見て，全体的なバランスが取れていることが大事であり，小さな足は身体の一部として意味がある。刺繍が施された美しい靴も身体の一部としての服飾である。纏足が美しいか醜いかを判断する時に，局部にこだわるのではなく，全体の雰囲気やバランスに注目し，足の長さや厚さ，幅などを，すべて全体像の中で見る。この認識は纏足のファンたちの共通認識だった。最終的に纏足の形や大きさは，女性の美醜を判断する際の重要な基準，いや，むしろ唯一の基準となった。3寸は当たり前で，それ以上に小さいものも現れたのだ。

しかし，なぜそこまで足を無理やり小さくする必要があるのか。男性たちの好みや美的基準に影響されていることは当たり前であるが，もっとも深刻な理由は小さな足にならないと女性たちは結婚できないということに関係する。

纏足をするかどうか，形が美しいかどうかが，直接結婚にかかわっていた。「大きな足をしている女性と結婚するのは恥ずかしい。小さい足の女性と結婚することは光栄」というような結婚観は中国の伝統社会にとって，当たり前の論理だった。 上流階層から一般の良家層まで，漢人居住地域から一部の少数民族地域まで，纏足の風習が広がっていた。

娘に纏足をすることは母親の「婦徳（ふとく）」（道徳・修養・容姿・孝行を女性に求める儒教の教え）を体現している。娘の纏足が小さくて形がいいなら，母親にとってこれ以上にない光栄となるが，できない場合，母親失格となる。それ故に，この母親の「婦徳」が纏足を続けていく上で大きな原動力となっているのだ。同時に，親は娘に対する期待も纏足に込めていた。纏足の風習が盛んになった時代では，「顔が良くても足が大きいなら，いい嫁いり先が見付からない」「顔がきれいではないが，足が小さいなら，いい嫁いり先が見付かる」という（尹，2003，pp.237-239）。

明・清期の纏足は， 当時の先端的な文化の神髄たる「装飾品」であり， 身体を損傷するどころか， 服飾の一部だったのである。また，流行に乗りたい，娘にいい夫を迎えたい，尊敬されたい，礼儀に叶い，洗練されていると思われたいという，普通の人々の普通の願いによって，纏足の風習はますます先鋭化することになった。

4. 纏足とセクシュアリティ

かつての男たちが纏足という風習を手放さなかった理由の一つに，儒教的な家父長制による女性支配や，歪んだ美意識などを挙げることができる。もう一つの理由としては，女性のセクシュアリティとの関係があり，これについても多くの研究がなされている。

1920年代には，機能主義的なドイツの「科学」説が中国社会に紹介された。その説は，足への損傷行為を性欲と結びつけ，纏足で歩くと太股を発達させることになり，外陰部が擦れて性欲を昂進させるので，天然の足の女性より性欲が強まるという（坂元，2004，p.186）。妓女は纏足の身体を商品として，エロティックな魅力を意識していた。つまり，身体の不愉快さ，不自由さよりもさらに大きな喜びがそこから導き出されるというのだ。

こうした論点は，台湾の医師で三寸金蓮文物館館長である柯基生（かきせい）（解剖学や心理学の視点から纏足を研究し，纏足のコレクター）が『金蓮小脚 ―千年纏足与中国性文化』の中で，纏足と性の関係を身体的構造や医学的視点から解釈している。挿絵の春画に描かれている足は素足ではなく，刺繍の施された靴に包まれている小さな足である。その説明文には「纏足は女性にとってもう一つの性器である」と記載されている（柯，2013，p.40）。

そして，柯は，女性自身が自分の足を小さくする過程で生じた痛み自体が癖になり，やめられなくなっていくのだと説く。つまり，女児が幼い時から，足を少しずつ巻いている過程において，傷んだ皮膚や骨，神経まで敏感になるので，少しの刺激で感じるようになる。こうして女児は徐々に性的感覚が芽生え「開発」されていく。それ故に，纏足の風習が長く続けられたのは，女性自身の性に対する感覚から，自ら足を布で巻くことになるのだとし，似たような内容は『采菲録』[3]にも記載されているという（柯，2016）。

こうした記述は男性の視点で書かれているものが多い。しかし，女性自身はどう思っているのだろうか。作家馮驥才（ふうきさい）の小説である『纏足』には，主人公の香蓮（こうれん）が自分の素足が男に握られた時の気持ちが描かれている。「香蓮は一人で昼寝をしていたところ，足を弄られている気がする。一本の指で，足指をしっかり押さえ，もう一本の指は踵にひっかけ，残りの指で足の真ん中のくぼみを軽くこすっている。くすぐったいというより，何と

3 『采菲録』副題「中国婦女纏足史料」全部で6冊，初編，続編は天津時代公司1936年1月，2月発行，三編，四編は天津書局1936年12月及び1938年2月発行。1941年，新編と精華編が出版された。纏足の史料，纏足に関する文学作品，纏足禁止や放足運動の資料，政府法令，宣伝文章，当時の人々の心得等々。大量の写真と挿絵があり，纏足の歴史を記載する書物として，もっとも大作。上海書店が整理した上で，1997年に再版した。姚霊犀主編。

も言えず，気持ちがよくなってくるのだ。しばらくするとやり方を変え，親指を横に，足の側面にあて，残りの指を足に巻き付けるようにし，足の内側に折れ曲がっている四本の足指を，ぎゅっときつく握りしめ，緩めたり，しめたりを繰り返す。緩められれば，心はふんわりうっとり，きつく握りしめられれば，胸がぎゅっと突かれるよう。ひとつひとつの動きが理にかなっているようだった。」（馮，1999，pp.74-75）。小説とはいえ，こうした描写から，少しは女性自身の体験が垣間見えるのではないかと思う。

また，纏足に施されている刺繍は，若い女性の技能と創造力を誇示するものだった。常に長いスカートの下に隠されていた小さな足は神秘的だった。その秘匿性こそが纏足の魅力であり，男たちの心を掻き立てていたのだ。セクシュアリティ的な側面から纏足を見ることは，従来の語りの中では，見落とされがちである。なぜならば，女性は客体として「語れない人」と見なされ，沈黙させられた存在だったからだ。

その秘匿性が西洋人のエックス線（レントゲン）によって暴露されたことにより，纏足にある流行，地位，礼儀といった付加価値や神秘性，魅惑は消え去った。同時に，中国女性の弱さが糾弾され，国家建設のために女性も参加させるべきだと中国の改革派が主張した。愛国的な改革にとって，纏足は時代遅れで抑圧的であると見られた。

かつて「文明の象徴」とされていた纏足が，近代になるにしたがって「野蛮」や「未開」のイメージになったのはなぜかを次節で見ていくことにする。

5. 纏足から放足へ，近代中国における女性身体の「発見」

この大きな価値観の転換点は，20世紀初頭の大阪博覧会（1903.3.5-9.13）とセントルイス万国博覧会（1904.4.30-12.1）で展示された野蛮な習俗としての女性の纏足であった。

1903年春，大阪で第5回内国勧業博覧会が開かれた。その中で「人類館事件」が起きた。「人類館」は各国の風俗を展覧することを名目としながら，実際は，アイヌ，台湾，琉球，中国，朝鮮，インド，ハワイ，ジャワなど「劣等民族」の人間を配置した見世物であった。中国人留学生たちが激しく抗議し，日本政府の干渉で，ようやく人間の展示を取りやめた（楊，2012；夏，1998）。しかし，人類館は台湾出身の纏足女性を配置していた。本当に台湾出身であるかどうかもだいぶ揉めていて，一部の人は湖南出身の女性と疑っていた。湖南出身の同郷会は反発し，侮辱されたと憤った。最終的に，ようやく「台北の女性」ということが分かって，何とか収まった（周，1903，p.14，18）。

この二つの博覧会事件を通して，中国国内の男性知識人のあいだで，纏足は恥辱であるとされ，「国恥説（こくちせつ）」（国の恥）として学校の教科書にも書かれるようになった。また，1904年3月13日の『警鐘日報』によると，「黎里不纏足会（れいりふてんそくかい）」（清朝末期，纏足を反対する民間組織の一つ）は，中国人が動物から人間に進化してきた過程において，ある生物学者の「人類は哺乳類の進化したものであり，進化が進むほど，足は大きくなり発達がよくなる」という言葉をもって，「科学的」な根拠として，「大きな足が文明の印である」ことを裏付けた。これをもって，纏足という風習は「動物の足跡の古い影を崇拝することに等しい」とされた（「黎里不纏足会縁起」『警鐘日報』1904年3月13日）。

当時，いわゆる「大衆の言論」と言われていたものは，ほぼ社会の変革を求める知識人の観念である。注意すべきことは，清朝末期，大多数の中国人は「纏足が野蛮な風習であり，国の恥である」ということにあまり関心をもたなかったということである。とくに庶民のあいだではそうであった。また，こうした民間の知識人と違って，たとえ纏足廃止を支持した官僚大臣の言論でも，「纏足＝野蛮」といった表現があまり見られなかった。つまり，西洋人からの中国人を「軟弱で無能，滑稽，下に見ている……」といったことに対して，悔しく思うことはあっても，纏足を自分たちの「野蛮性」と関連付けて発言したことはあまりなかった。公に政府がこの纏足観を受け入れ，正式に大量に表現するようになったのは，民国期（みんこくき）（1912-1949）以降になる（楊，2012，p.88）。

二つの博覧会事件を通して，事実はどうであれ，「博覧会の恥辱」という集合的な記憶が確立し，アイコンとして纏足は「国恥の象徴」となったのだ。外国人が纏足をしている女性と接触することを禁止し，さらに，刺繍の靴や纏足の工芸品，飾り物なども禁止するようになった。1945年に上海の警察が，南京路や広東路といったメインストリートにある骨董屋や雑貨屋で売られている纏足に関するグッズを見て，中国を侮辱するものとして取り締まるようになった[4]。

1940年代の上海では，纏足する女性が少なくなった。纏足という事象は女性の身体から徐々に身体以外に移っ

4「上海市警察局行政処取締古玩店等出售旧式纏足女靴，取締製造纏足小泥人」1945年末－1946年初，上海市档案館藏档案，全宗号Q131，目録号4，案卷号2291。

ていった。警察の取締対象となった纏足に関する物品の製造者は中国人である。警察にとって，集合体の記憶としての纏足は，特別で象徴的な意味を持っているから，小さな靴や小さな足をしている人形を外国人に販売することを，商人たちに許さなかったのだ。ここに，近代になって急に変わった纏足観がいかに中国人自身にも影響していたかが読み取れる。と同時に，この嫌な集合体の記憶をいち早く抹消したいと試み，努めていたことも分かる。しかし，残念なのは，この纏足にまつわる集合的記憶は，今なお語り続けられており，消えないのである。

胡はある論文の中で次のエピソードを紹介している。一人の夫人がもう一人の夫人に対し，自分の旦那が外国に行って三日しか経ってないのに，もう手紙が来たと語る。手紙には「博物館の中で展示されている中国の纏足の靴を見て，どれだけ屈辱を感じたことか！」と書かれていたという。しかし，夫人は「彼自身がどれだけ小さな足に溺れていたのかを忘れたのか！」と怒りを込めて指摘したのだ（胡，1929）。

この事例から，足と靴を別々に展示していたことが見て取れる。また，男性の纏足に対する心理の転換は速やかで容易だったことも分かる。あんなに「三寸金蓮」に夢中だったのに，あっという間にそれを「恥辱」と感じ，怒りを込めるようになったのは，いかに「纏足＝野蛮」という観念の影響が大きかったかということを物語っている。

一方，放足が叫ばれている中で，女性はどうなったのだろうか。纏足廃止運動が盛んになるにつれ，多くの女性は現実的な問題に直面することになった。まず，足の大きさはいったんでき上がると変えられないのだ。また，昔は結婚のために，女性たちはスカートの下の三寸金蓮（図４）にこだわっていたが，19 世紀末になると，その纏足は逆に離婚の口実になり彼女たちを困らせた。

図４　長いスカートに隠された纏足
出典：高洪興（2007）『纏足史』上海文芸出版社，p.162

19 世紀末になると，上流階級の家庭は娘に纏足させなくなった。都市エリートのあいだでは，纏足は数十年のうちに姿を消し，それに取って代わったのはハイヒールだった（図５）。しかし，地方では，都市の流行の影響はあまり受けなったので，纏足廃止はなかなか進まなかった。

図５　脚之沿革
出典：高洪興（2007）『纏足史』上海文芸出版社，p.162

政府によって，強制的な手段[5]が取られたが，彼女たちは「与えられた解放」を必ずしも喜んで受け入れたわけではなかった。苦しみに耐えて，より小さくと努力し，嫁ぎ先でも褒められていたのに，今さら布を解けと言われても解けないのだ。「足を解けば解放される」というわけではない。放足は，身体的のみならず，精神的にも激痛をともなう試練であった。骨の変形をともなう纏足は，無理に解放しても苦痛を増すばかりで回復はありえない。にもかかわらず，放足が強制される理不尽さで，女性たちは二度目の精神的肉体的な痛みを受けるのである。

近代中国社会でもっとも早く纏足廃止を提唱したのはキリスト教徒だった。彼らは，中国の纏足の風習に困惑し，理解できなかった。纏足の女性は耐え難い激痛を体験し，その苦しみをよく知っているはずなのに，彼女たちが親になった時に，自分の娘の足を布できつく巻いて，同じ目に合わせるのはなぜなのか。後になって，宣教師たちも分かったように，中国の男たちは「大きな足を持つ女性を妻にしたくない」から，「放足」はイコール「嫁に行けない」ことなのだ。纏足禁止が叫ばれていた時，女性たちはいい夫が見付からないと，自分の婚姻を心配していたことも想像がつくだろう（王，2013）。

纏足の女性たちにとって，靴は衣服の一部であり，靴と衣服を合わせて一つのコーディネートになるのだ（楊，2005，p.127）。清朝末期の反纏足運動の隆興につれ，放足後どのような靴を履けばいいのか，どのような服をコーディネートできるかといった，女性にとって極めて

5 国民政府は，纏足の廃止を国家行政の管理下に置き，一種の国家行為としてこれを行った。とくに1927年以降の反纏足運動ははっきりと暴力的で強制的なものになった。山東省や河南省などの地域では，女性警官が毎日のように家まで来て纏足の女性を調べた。また高額な罰金を課したり，大衆の前で恥をかかせる公開断罪も多々あった（尹，2003，p.245；候・趙，2013）。

現実的な問題が出てくる。しかし，今までの女性史研究では，こうした問題をほとんど取り上げてこなかった。突然起きた激しい社会変化を目の前に，女性たちはどうしたらいいのか困惑していた。これは，足の布を解けばいいだけの話ではない。服飾の一部としての纏足の代わりに合う靴がないし，合う服もないのだ。

先に放足した女性たちは，何を履けばいいのか困っていた。そこで，さまざまなことを試み，従来の小さな靴が履けないなら，靴の形の変化も必要になる。しかし，どのように変わるのかは誰も分からないのだ。比較的早く成立した湖南の「不纏足会」（纏足しない会）は，「纏足しない女性は，従来の様式の衣服を着ることができるが，ただ靴と靴下は男装と同じものにするべき」と規定していた（姚霊犀主編，1936，pp.16-17）。また，杭州放足会も，「放足後の靴のデザインを協議する」ことを会員間で評議していた（「上海天足会第二次集議啓」『大公報附張』1905年1月23日）。

こうした記述からもうかがえるように，纏足廃止後，女性たちはどのような靴を履くのかという問題に非常に悩んでいた。一部の女性は，天足にしたい気持ちはあっても，なかなかそれが実現できないのは，変形した足が履ける靴がないからだと証言した。古い靴が廃止されたが，新しい靴が用意されていないため，多くの女性たちが纏足を廃止したくてもできないのだ。そこで，男性の靴を履くことが勧められた。

この新旧過度期において，新しい靴が現れるまで，一方では各地の靴の様式において多様化の特徴が現れた。他方では，人々の服飾着用の観念にも開放的な傾向が見られた。かつて厳しく規定されていた男女別，満漢別の着衣ルールにも，多かれ少なかれある程度の変化が見られた。

図6　纏足の女性のための革靴
出典：コウ，ドロシー（2005）『纏足の靴―小さな足の文化史』平凡社，p.160

たとえば，女性の靴（図6）は少し尖っていたほうが美しいとされ，このことで男性の靴と区別ができるといい，男性のような大きくて丸くて四角い靴は禁忌である（躍，1941，pp.115-116）。また，一部の地域では，放足後の新しい靴のデザインは，男性靴の形を取り入れるべきだとされた記録[6]もある。

さらに，当時，新しい靴の様式については，男女の区別を突破することを試みただけではなく，満洲人と漢人の境界を突破する主張にもなっているといえる。もともと清末期，漢人のあいだでは，満洲人など異民族と区別するために，小さな足が目印だった。大きな足が満洲人であり，小さな足が漢人である。しかし，この時期になると，知識人たちは，漢人女性の服飾に対する助言の中で，かつて満漢を区別していた旗人女性の服装も徐々に漢人女性が選択できる服の様式となり得ると助言するようになった。さらに一部の人は，満漢の領域を突破するために旗人女性の服装を取り入れるべきだと主張した（楊，2005，p.129）。とはいえ，当時の多くの漢人女性の本音は，「旗人女性の服を着たり，靴を履いたりすると，バランスが取れない。しかし，旧式の服飾と靴にすると，長いスカートが床に擦れて歩きにくい」ということであった。

纏足が社会的な風習として長いあいだ流行したため，「小さな足が美しい」「大きな足が醜い」という美的観念が形成されてきた。この美的観念が時代の変遷とともに多かれ少なかれ変化したことは言うまでもない。しかし，日中戦争までは，一般の庶民の間では「小脚美」の観念には根本的な変化が見られなかった。纏足廃止の気運が高まり始めた時でも，「小脚美」の意識が広く存在し，日常生活の中で，放足した女性が軽蔑されていたことも多々あったため，放足した女性はのち密かに足を巻くようにしたという（王，2013）。

纏足のために足を布で巻くという行為は女性自身が行ってきた。この行為には男性の美意識が隠されていることは否めないが，纏足の美醜は女性が自分で判断したのである。もちろん，纏足にまつわる激しい苦痛は女性たちも知っていた。最初に足を布で巻く時は嫌々やらされたことが多かったにしても，小さい足が美しいという社会の美的観念ができ上がってからは，多くの女性にとって，纏足の実施は受動的から主体的なものに変わった。女性たちが時代に合うような美的観念を追いかけたことが，纏足という風習が大流行した一大要因となっていた。

近代中国における身体史の研究には，女性の実践という視点が欠けていた。女性は家の一部であることが前提とされ，女性「個人」の「好き嫌い」には無関心だった。近代中国社会の身体人類学的研究は，主に三つの側面から行われてきた。一つ目は，社会史的研究としての「身

6　1898年，「貴州不纏足会条約」の中では，「纏足をしていない女性ならば，靴は男性ものと同じデザインで，丸めのある靴は素朴で自由で履きやすい……」（呉，1981，pp.78-81）という。

体生成史」研究であり，フーコーなどの欧米学者や台湾・香港の研究を紹介しつつ，中国古代の気論，礼教，儒教的身体政治観および近世の情欲観などの側面から論じられてきている。二つ目は，身体を文化的媒介としてとらえ，宗教，民俗，民族芸術における女性の禁忌や刺青，身体禁忌などに着目した，メアリ・ダグラス（汚穢と禁忌）流の「身体民俗」研究である。三つ目は，ブルデューがいうような，身体の特徴における社会的区分けや趣味は文化資本や身体資本として管理されるという視点からの，消費時代における「身体消費」の研究である（瞿，2008，pp.345-364）。

こうした語りの中で，女性の能動的身体実践はさほど重要ではなかった。しかし，国民国家の出現とともに女性の存在は「再発見」されたのだ。アヘンを嗜む男たちは「東亜病夫（とうあびょうふ）」（東アジアの病人という意味で，体が弱いだけではなく，精神的にも変化に無頓着でいる中国人たちに対する風刺的な言い方）になり何もできない。だから女性たちの労働力が必要だというわけだ。まず，弱々しい纏足の女性の身体を「解放」することである。男性知識人たちは女性らに纏足から放足へ，そして天足へと，要求を変えた。また，彼らは当時の優生学に基づいて「強くて健康的な子孫」を残すために，母体の健康が不可欠であるとして，纏足批判をさらに強めた。こうして，女性を「国民の母」として認知し，女性の身体は「国民の身体」として「発見」されたのだ。同時に，中国の負のイメージは女性の小さな足にのしかかったのだ。

6. おわりに

本稿は，纏足が歴史的文脈の中でどのように変遷してきたのか，またその変遷の中で当事者である女性の意識はどのようであったのかという問題を軸に，近代中国での纏足観の錯綜と推移を見てきた。

現在，教科書で語られる纏足観は，19 世紀以降の宣教師や人類学者・医師・啓蒙家たちの文献に依拠したものが多い。 纏足は，中国の停滞の象徴と見なされ，身体の障害としての見方が強調されて，女性はかわいそうな存在であると語られる。纏足という風習はもっぱら理解しがたい「異教徒の野蛮な習俗」として蔑むという西洋のまなざしが投影されている。

一方，17 世紀中国の男性知識人は纏足を三つの視点からとらえていた。①中国の文明性の表現として，②漢人と満洲人を区別する民族的境界の指標として，③身体の装飾として（マン，2015，p.117）。また，清朝末の文人の纏足観は「女性美の象徴」から「畸形（きけい）・廃疾（はいしつ）の典型」へ，そして「国粋から国恥へ」と推移した（坂元, 2004, p.154）。纏足から放足，そして天足へと方向転換した。女性は二重三重の痛みを耐えないといけなくなった。

授業を受講した学生から寄せられた，「纏足へのイメージは大きく変わった。詳しく学ぶ前はただ苦痛をもたらし，女性を抑圧するためのものというイメージしかなかった。しかし，纏足を望んでいた女性の存在や纏足を取り囲む概念，通過儀礼としての意義，結婚の条件として不可欠なものであったことを知って，負のイメージばかりに眼を向けるべきでなく，人々が纏足を重んじた理由と価値観を第一に理解しなければならないと実感した」といった感想を目にして，日本における纏足のイメージも，複合的なものになることを願うばかりである。

最後に，聖心女子大学グローバル共生研究所から本稿の執筆機会を与えてくれたこと，また JSPS 科研費基盤研究 C（JP17K03292）の助成を受けたことを記して感謝申し上げたい。

引用・参考文献

尹立芳（2003）『譲女人自己説話―文化尋踪』三聯書店.
王莉敏（2013）「近代中国不纏足運動中纏足女性固守纏足的原因探析」『青年与社会』VOL.541, NO.11.
夏暁紅（1998）『纏足をほどいた女たち』朝日新聞社.
高洪興（2007）『纏足史』上海文芸出版社.
胡也頻（1929）9月25日「小県城中的両個婦人」『東方雑誌』第26巻第18号.
柯基生（2013）『金蓮小脚―千年纏足与中国性文化』独立作家.
――（2016）『性・歓欲・金蓮―解構金蓮性文化』独立作家.
候傑・趙天鷺（2013）「近代中国纏足女性身体解放研究新探―以山東省淄博市部分村落為例」『婦女研究論叢』第5期, pp.62-68.
コウ，ドロシー（2005）『纏足の靴―小さな足の文化史』（小野和子・小野啓子訳）平凡社.
呉恩栄（1981）「貴州不纏足会条約」『貴州文史叢刊』第4期，貴州省文史研究館, pp.78-81.
坂元ひろ子（2004）『中国民族主義の神話―人種・身体・ジェンダー』岩波書店.
周宏業（1903）「大坂博覧会人類館台湾女子事件」『浙江潮』第4期.
瞿明安編（2008）『当代中国文化人類学（上）』雲南人民出版社.
沈従文（1981）『中国歴代服飾研究』商務印書館.
馮驥才（1999）『纏足』（納村公子訳）小学館文庫.
マン，スーザン（2015）『性からよむ中国史―男女隔離・纏足・同性愛』（秋山洋子・板橋暁子・大橋史恵訳）平凡社.
吉岡郁夫（1991）『身体の文化人類学―身体変工と食人』雄山閣.
楊興梅（2005）「被“忽視”的歴史：近代纏足女性対于放足的服飾困惑与選択」『社会科学研究』第2期, pp.132-138,158.
――（2012）「纏足的野蛮化：博覧会刺激下的観念転変」『四川大学学報』第6期, pp.82-90.
躍龍（1941）『采菲精華録』天津書局.
姚霊犀主編（1936）『采菲録』天津書局.
「黎里不纏足会縁起」『警鐘日報』1904年3月13日.
「脚之沿革」『女報』第1巻第2号刊, 女報社出版, 1909年2月.